



TITLE:

<大會抄録>新羅の王畿について

AUTHOR(S):

木村, 誠

CITATION:

木村, 誠. <大會抄録>新羅の王畿について. 東洋史研究 1982, 41(3): 600-600

ISSUE DATE:

1982-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153870>

RIGHT:

大會抄錄

新羅の王畿について

木村 誠

新羅時代の朝鮮に、王畿（京畿）が行政区劃として設定されていたかどうかは明らかではない。史料的にも王畿の存在が明確になるのは、高麗時代に入ってからのものであり、一〇世紀末の赤縣六・畿縣七の制定をそのはじめとする。それ故、新羅以前の王畿の存否については意見がわかれるところである。たしかに高麗時代の如き廣大な地域を包括する行政区劃としての王畿は、新羅以前の朝鮮には存在しなかったと言えよう。だが、王都をとりまく狭い地域に限れば、他の郡縣とは性格を異にする特殊地帯が設けられていたとみえることは許されると思う。かつて井上秀雄氏は、それこそが新羅の王畿にはかならないとし、その歴史的意義を「慶州門閥貴族の經濟的・軍事的基盤」と規定した。また日本史側からは、古代の畿内制成立の前提として朝鮮三國における王畿の存在を想定する見解も示されており、議論をよんでいる。新羅以前の王畿の存否をめぐる議論は、六世紀から一〇世紀初頭にいたる四〇〇年間の新羅の國家構造の特質を、東アジアという視野の中で検討することを求めていると言えよう。本報告は、そうした立場から、新羅の王畿をめぐる現在までの議論を整理し、改めて新羅王畿の構造・歴史の意味を検討

しようとするものである。

戰國時代の楚文化と朝鮮

——無内銅戈をてがかりに——

江村 治樹

一九五八年、安徽省淮南市の趙家孤堆二號墓から、「内」の部分 が切斷された用途不明の無内銅戈がまとまって出土した。その後、このような銅戈は時折發見され、近年とりわけ出土數が増加している。そして、最近、湖北省隨縣の曾侯乙墓から柄に装着されたままのものが出土し、それは有「内」の戈と組合せて一つの特異な武器を構成したものであることが明らかとなった。

このような多戈の武器を實戰用とする考えもあるが、わざわざ「内」を切斷して柄に装着している點、實戰用としての機能を無視して作られたものと考えざるをえない。また、無内銅戈は、戰國時代の吳、越や楚を中心とした地域に限って出土しており、このような武器はこの地域における銅戈に對する特別な意識のもとに作製された武器と考えられる。

一方、朝鮮半島においても、漢初頃から、「内」の部分が極端に小さい特異な銅戈が製作されるようになる。日本の銅戈の祖型となつたこのような朝鮮製銅戈は、これまでその來源は明確ではなく、その用途も解明されているとはいいがたい。しかし、「内」が極端に小さいという基本的な點において中國の戰國時代の無内銅戈と共